

はるかなるウラジオストク

薬学雑誌 1907 年度 721 頁

明治時代は今よりずっと国際的で、薬学会会員は駐在する海外から地区通信を送っていた。日本領であった台北、高雄、台南、澎湖島からは当然記事が届いたし、海南島、威海衛、釜山、京城、平壤通信も誌面をにぎわした。旅順通信とか上海通信とかが、神戸通信と福岡通信の間にあったりする。他に広東、大連、遼陽、奉天通信などが目につく。まさに「坂の上の雲」の世界が薬学雑誌にも反映されていた。

ロシア、浦潮斯徳通信もある。ここはシベリアを控えた大通商港だった。1901 年有税港となり、外国船の入港は減るが、日露和平後は再び自由港となった。湾岸埠頭の完成、鉄道整備に加え、砕氷船の活躍で冬季も完全利用可能となり大いに栄えた。この明治 40 年薬誌記事によれば、市の総人口は 8 万。支、韓国境に近接し、露領となったのも 1860 年であるから元来中国、朝鮮人が多い。彼らは半数近くを占めていたが、在留日本人も 4 千人(男 2,500 人)いた。我が邦人の主な職業は商業、大工、時計職、写真師、裁縫、理髪、洗濯、席貸など。

薬誌通信員、三島愛之助は当然医業の状況も書いている。ロシア人医師は、内科婦人科がアカバトフ氏他 5 名、神経・耳鼻科・梅毒科・外科がベルレル氏他 5 名、以下、按摩科 4 人、産婆がコゼウニコワ嬢他 5 名、獣医 6 人、歯科 4 人、薬剤師はケウレル氏他 5 名。一時騒がれた日本人医師開業禁止の件は、当地で開業していた者に限り、しばらく営業が許されることになった。

彼はケウレル薬局の薬品を調べている。ほとんどドイツ製で品質精良という。1 tt あたりの値段は、薄荷脳 10 留、硼酸 40 哥、吐根 9 留 20 哥、沃度加里 8 留 70 哥、重曹 15 哥、安知必林 10 留など。留はルーブルで当時 1 円 5 銭(薬学会年会費は 3 円)、哥はカペイカだが、tt はロート(13 g)だろうか? よく分からない。

往時を偲ぶには、地図をさかさまにしてみると良い。新潟秋田から見れば、すぐ対岸にあって九州よりずっと近い。地理的距離と社会距離がそれほどずれていない、本当の意味で「日本」海」の時代だった。あのまま戦争がなければ真の大東亜共栄圏、五族協和の東アジア共同体ができていたかもしれない。

小林 力